

「延世大学校スプリングスクール参加報告書」

京都大学総合人間学部 2 回生 竹内優希

プログラム期間中、9時から13時までの4時間は集中的に語学堂での授業があり、午後には料理教室やナンタ公演の鑑賞などの文化体験があったり、自由時間で言語交換のパートナーと一緒に出掛けたりして過ごしました。私はこのプログラムに、韓国語学習経験がゼロの状態に参加したため、語学堂での授業はごくごく初歩の部分の学習でしたが、クラスには様々なバックグラウンドを持つ人たちが集まっており、日本で外国語の授業を受けるのとは全く違う発見が多くありました。授業では、自分や自分の国、家族のことなど、身近な話題について質問したり答えたりを韓国語でするという場面が多くあり、そのなかで、これまでは名前と場所しか知らなかったような国のことを知り、身近に感じられるようになりました。また予想外に新鮮に感じたのは、海外から見た日本のイメージをじかに知ることができたことです。たとえば「どこの国の人ですか?」という質問がメインピックの授業で、神楽を舞う巫女の絵が出てきたとき、多くのクラスメイトがそれを「ゲイシャ」だと答えていました。その絵は、日本人から見てもすぐには何のことかわかりにくいとはいえ決して「芸者」ではなく、また現代において、「日本らしさ」の代表が「芸者」だとも思えません。しかし、それがたとえ実態とずれていたとしても「典型的なイメージ」のもつ力は強いし、私自身も、よく知らない国のことをそのようなイメージで、知っているつもりになっているのだと気づかされた、印象深い出来事でした。

3月10日に行われた、延世大学の国際学部の学生との共同セミナーも、非常に刺激的で有意義なものでした。私たちは事前に、お互いへの質問を送り、それに基づいてそれぞれが自国の文化や社会についてのプレゼンテーションを行いました。ポップカルチャーや大学生活のことに加え、かつての植民地支配についても含めた日韓関係や徴兵制についての考えなど、デリケートな話題にも触れた質問を送っていたのですが、その場しのぎでなく考え抜かれた内容の発表を流暢な英語でしてくださり、隣国韓国のこと、そして隣同士である日本と韓国の関係について、同世代の実感を通して知ることができたのは本当に貴重な機会だったと思います。また延世の学生がいかに一生懸命に勉強しているか、普段から自分の頭で考える訓練を積んできているかということ、どんなデータを見るよりも肌で感じ、私自身が今後学問へ向かうことへの強い刺激をいただきました。

学校での活動以外でも、旅行ですら海外に出たことのなかった私にとって、韓国での日常のあらゆる行動が新鮮な体験でした。母国語でない言葉ばかりのなかで街を歩き、食事をし、地下鉄やバスに乗る、という経験を積む中で、次第に、分からないながらも自力で動く行動力と度胸が身についたように感じます。また、渡航前には、3回生以降に進む専攻を、入学時から目指してきた人類学に決めるのか、より文献研究に軸を置く東アジア思想・社会の研究室に入るのかを迷っていたのですが、3週間韓国に滞在し、これまで自分を取り巻いてきたのとは異なる街や人々の様子にじかに触れているうち、やはり、フィールドワークを行い、生身の人と出会っていくことが出発点になる人類学に進もう、じかに人と関わる場に、臆さず自分を置いてみようと思うようになりました。

このプログラムを通して、一つ一つは決して派手ではないものの、少しずつ私の背中を押してくれる出来事に出会うことができ、非常に有意義な20日間でした。

한국에서 3 주간, 많은 일을 배워, 매우 즐겁게 보냈습니다. 감사합니다. 이 경험이, 향후의 나에게 있어서 도움이 되는 것이 된다고 생각합니다. 감사합니다.